

題名:無知公理-定義存在学-
副題:空間選択によるヒエラルキー階層
著者:[吉見真一](Shinichi Yoshimi)
場所:[日本](沖縄県)
Email: akbfp443@me.com
ORCID: 0009-0008-8121-8947
日付: 2026年1月17日

【本論文における記述ルール】

1. 括弧と強調

- ・【】: 章題、主題、大分類
 - ・[]: 数式番号、引用番号、下位分類
 - ・(): 補足説明、翻訳、略語定義、数式内の演算順序
 - ・《》: 本論文で独自に定義・提唱する重要概念
 - ・{ }: 概念のID番号 (文脈によらず同一の定義であることを示す固定ID)
-

【ID記法・概念定義一覧】

本論文は[定義存在学 数学文法認知哲学と数学的理想主義の記法定義]
(<https://doi.org/10.5281/zenodo.17785174>)を基礎定義として用い、本論文独自の定義と統合して管理する。

[本論文独自定義]

- ・《無知公理》{001}
存在は、認識により記述を意識している。意識を主体とする状態を作っている現象。解を1つ選ぶことで、選ばれない他を選んでいる作用。
- ・《反証》{006}
問題が成立していない。問題の条件が成立していない。問題の提示ができない。などという反証があるが問題を固定すると答えとなってしまう。
- ・《ヒエラルキー階層》{007}
無知公理の主体が固有公理となった場合現象化する構造。
- ・《固有公理》{008}
《固有》{018}の《公理》{017}

[定義存在学 (<https://doi.org/10.5281/zenodo.17785174>)より引用・継承される定義]

- ・《意識》{002}
基準の定義。
- ・《認識》{003}
結果の定義。
- ・《抽象》{004}
認識の集合的感覚。
- ・《概念》{005}
意識の集合。
- ・《存在》{009}
定義された物。
- ・《主体》{010}
基準。
- ・《状態》{011}
存在が認識し記述できる集合体系。

- ・『的』{012} (○○的)
基準の相似。
- ・『記述』{013}
基準からの力学による記号。
- ・『定義』{014}
JIKANの差。
- ・『解』{015}
記号と同一。
- ・『現象』{016}
主観的な状態と客観的な状態の同一性。
- ・『公理』{017}
基準。
- ・『固有』{018}
存在の集合体系・存在が主体として客観的に記述する力学を有する状態。

[定義存在学 (<https://doi.org/10.5281/zenodo.17785174>) より引用・継承される定義の記法を説明するための抜粋]

- ・記号：存在の構造化。(物質と定義することができる)
- ・排除：同一性を定義するための結果
- ・集合：定義が基準になる。
- ・相似：集合の定義力学。
- ・力学：定義による密度差。
- ・主観：存在が基準となる。
- ・客観：定義が基準となる。
- ・○○体系：集合の状態。
- ・密度：定義と結果の力学の記述。
- ・構造：計算を解とする固有体系
- ・階層：計算を排除する固有体系

=====

【『無知公理』{001}】
 『存在』{009}は、『認識』{003}により『記述』{013}を『意識』{002}している。
 『意識』{002}を『主体』{010}とする『状態』{011}を作っている『現象』{016}。

『存在』{009}が、『認識』{003}を『主体』{010}として『記述』{013}する『定義』{014}は『抽象』{004}となる。
 『存在』{009}が、『意識』{002}を『主体』{010}として『記述』{013}する『定義』{014}は『概念』{005}となる。

『抽象』{004}『的』{012}記号を『解』{015}とする時、『概念』{005}『的』{012}『解』{015}を記号として『定義』{014}していない『状態』{011}。

[例. 1]

問題

A・B・Cの中から1つ選んでください。

答え

A

[無知公理]

『解』{015}を1つ選ぶことで、選ばれない2つを選んでいる。

[例. 2]

「DO」の意味を答えなさい。

AIでの回答

動詞（一般動詞）：する／行う

助動詞（疑問・否定・強調）：疑問文を作る、否定文を作る、強調

代動詞（同じ動詞句の繰り返し回避）：そうする／同じことをする

名詞（口語・英英圏の用法）：やるべきこと／仕事、パーティ、ド（音名）

[無知公理]

「DO」に対して「Do」・「do」などを選択する。

[例. 3]

1+1を答えなさい

答え

2

[無知公理]

数学の四則演算をする。

「1+1=」では答えは2だが、「1+1を答えなさい」は質問として成立していない。

【《反証》[006]】

問題が成立していない。問題の条件が成立していない。

問題の提示ができていない。などという《反証》[006]があるが、問題を固定すると答えとなってしまう。

[反証例. 4]

問題

A・B・Cの中から1つ選んでください。

ただし、BとCは必ず選ばないこと

答え

A

つまり、《無知公理》[001]を含まないと《解》[015]は導き出せない。

【《ヒエラルキー階層》[007]】

《解》[015]を《記述》[013]する場合、《主体》[010]を《無知公理》[001]とした場合

[1] 《存在》[009]は、《認識》[003]により《記述》[013]を《意識》[002]している。《意識》[002]を《主体》[010]とする《状態》[011]を作っている《現象》[016]。

[2] 《存在》[009]が、《認識》[003]を《主体》[010]として《記述》[013]する《定義》[014]は《抽象》[004]となる。《存在》[009]が、《意識》[002]を《主体》[010]として《記述》[013]する《定義》[014]は《概念》[005]となる。

[3] 《抽象》[004]《的》[012]記号を《解》[015]とする時、《概念》[005]《的》[012]《解》[015]を記号として《定義》[014]していない《状態》[011]。

[4] 《存在》[009]が、《無知公理》[001]を《主体》[010]として《記述》[013]する《定義》[014]は《概念》[005]となる。

[5] 《無知公理》[001]の《主体》[010]が《固有公理》[008]となった場合、《ヒエラルキー階層》[007]は現象化する。

【結論】

問題を作る際に、《無知公理》[001]を作ってはいけないということではない。

《ヒエラルキー階層》[007]を作ってはいけないということではない。

《記述》[013]や《定義》[014]において『問題と《解》[015]』は、《無知公理》[001]を《記述》[013]することで『問題と《解》[015]』を計算し再現することができる。